

銀賞

『 第一歩 』

トヨタ自動車株式会社 東富士研究所
柳井 克之

"カラン"手からボルトが滑り落ち設備の隙間に吸い込まれるのが見えた。「やっちゃった…」慌てて車の生産ラインを止めた。

普段、私はトヨタ自動車の開発部門にて設備保全の業務を担当している。未来の車や技術を生み出すべく設備の故障を未然に防ぎ、試験部署がスムーズに開発に取り組めるようサポートをする大事な役割を担っている。だが、上手くいかないことも多々ある。不具合の原因が分からず、修理が手詰まりになると「まだ直らないのか？」と厳しい声を浴びることもしばしば。こっちだって精一杯やっているのになぜそんな言い方をされなきゃいけないのか。そういう気持ちを押し殺しながら日々保全と向き合っていた。

そんな中、車の生産ラインへ実習で行くことに。ふと、初めて設備を使う側になったことに気付いた。担当したのはプリウスのブレーキ組み付け工程。生産現場では工程に時間が決められており一秒を削るために日々努力している。緊張感が張り詰める中、私はラインを止めてしまい保全担当者が処置をしに来た。絶対怒られる。そう思い謝ろうと頭を下げた。「ありがとう！」予想に反する言葉に顔を上げた。「すぐに止めてくれたおかげで設備の故障を防げたよ！」と言われ、「えっ…？こちらこそありがとうございます」戸惑いながら返事をした。

部品なんか落とすなよ…。私ならそう思い嫌な顔をして現場に向かっただろう。思いもよらない保全担当者からの「ありがとう！」という言葉に修理してくれたことに対する感謝の気持ちが自然と湧いてきた。

自職場に戻り数か月経ったある日。「プルル…」「もしもし修理依頼でしょうか？」「設備から水が溢れて大変なことになっています」到着した時点で設備内は水浸し、下のフロアまで水が漏洩してしまっていた。原因はユーザーに管理を任せているフィルターの清掃忘れ。今までの私なら責任をユーザーへ押し付けていただろう。しかし、その時生産ラインでの経験が頭をよぎった。私もユーザーに感謝される保全マンになりたい。そう思い設備の改善をスタート。「誰が見ても同じように異常を発見できるようにすることが重要だぞ！」という先

輩の助言を基に試行錯誤を重ね、フィルターの詰まりを検知する機能を追加することに成功。その結果をユーザーへ報告すると「再発防止までしてくれてありがとう！」ユーザーの笑顔を見ると嬉しさと達成感がこみ上げてきた。さらに「日常点検で圧力値を記録して異常があったらすぐフィルターを清掃するよ！」との提案。コンディションベースでの運用に変更することで異常の早期発見に繋がった。自然と私の口からも「お願いします！ありがとうございます！」と感謝の言葉が素直に出た。

壊れた設備を修理するのは私たちの仕事である。しかし、それだけでは設備を維持することは決してできない。使用部署との連携が必要不可欠なのである。私には一人前の保全マンと言えるほどの知識や技能もまだまだ足りないが、ユーザーへ素直に感謝し、相談しやすい関係性を構築することは今からでも始められる。使用部署と保全部署が互いに協力し合い、感謝することで TPM の第一歩を踏み出していく。